

がはらレッスン

〇〇一

といった具合で分担してもらうことになつて了一
でもこれは月曜日から土曜日までの話で、日曜日は休
みのはずなんだけど……

それは、惰眠をむさぼつていた僕を起した戦場ヶ原
からの電話により、急遽決まつたスケジュールだった。

八月六日。今日は、日曜日。
（この）ところ、僕は戦場ヶ原と羽川に勉強を教えて
もらうという、受験生としては……いや、そうでなく
とも幸運といえるであろう毎日を送つていた。

な——といった具合で。

二人とも学年トップクラスの成績、いや、羽川は
トップクラスどころか、本当にトップの成績だつたの
だから、これを幸運と言わないのなら、何を幸運と
言つたらよいのだろう。

それは、勉強以外の色々な意味においても勿論そ
うなんだけれど、まあ、そのあたりは、あまり深く突つ
込まないでおこう。

不自然な会話。ソワソワしていた戦場ヶ原。電話口
でも、なんとなくわかるくらいに。いや、ソワソワし
ていたのは僕もだつた。

でも、折角の日曜なんだし、勉強じやなくてもいい
にはいかないので、偶数日は戦場ヶ原、奇数日は羽川
勉強を二人から同時に教えてもらう……というわけ

そう、それは、あれ以来初めての休日だつたのだから
なんじやないか。普通に会えればいいのに——

それでも僕は嬉しくて、急いで色々と用意をし、自転車で戦場ヶ原の部屋に向かってしまうのだった。

——階段を昇る。

カンカンカンという古いアパートによくある鉄板製の階段の足音。

戦場ヶ原の部屋は民倉荘の二階の端、二〇一号室。

ここ以外では見ることのない鋳た手すりと階段の音が、僕の中では民倉荘のイメージになつていて。即ちそれは、学校の外で彼女と会うことができるということを意味するわけで——僕はそれだけで嬉しい気分になつてしまふ。

戦場ヶ原は僕の足音に気付いたらしく、階段を半分くらい昇つたあたりで扉を開け、優しい笑顔を見せてくれた。

「いらっしゃい。早かつたのね、阿良々木くん」

彼女はTシャツに長くないスカートという、この季節らしいラフな格好だった。

短かいわけではなく、あくまでも長くないという感じだけれど、私服は長いスカートしか持つてないものだと思っていたから、ちょっと意外だつたりして。

あ、でも、八九寺と出会つたときの、あの可愛い至福の瞬間を味わわせてもらつた私服は——ああ、あれはキユロットか……

スカートの丈が少し短かくなつたように——あれから彼女は少しずつ、明るく、可愛い表情をすることが多くなつた。ただ、それもまだ慣れてないようで、たまにはつと気付いたように恥ずかしそうな表情をする。恥ずかしがることないじやないか！ 別に自然なことなんだし。

僕は正直、嬉しくてしようがなかつた。

ツンツンの戦場ヶ原も、それは魅力的（言つておくが僕はそういう特殊な性癖は持つていない……つもり）——だけど、やっぱり女の子は自然な方がいいと思つている。

まあ、もつとも、あくまでも昔——というか出会つ

ちやぶ台を挟んだ位置で、戦場ヶ原は言う。

た頃に比べてというだけで、基本はツンツンの鉄仮面なんだけど。

つて、鉄仮面なんて（僕は）言つてるけれど、クー

ルで……綺麗なんだよな——出迎えてくれた戦場ヶ原の顔を見ながら、見つめながら、そんなことを考えていた。

「……なによ」

「ん、なんでもないよ」

けど

「だから、今日は特別レッスンをします」
相変わらず聞いてねえな。人の話を……

「聞いてるわよ」

「心の声には地獄耳か！」

「ひたぎイヤーは地獄耳よ！　ふふ——そうね。耳といえба、耳なし芳一って知つてる？」

「ああ。あの、お経を全身に書いたっていう、昔話

強をしていた。

「はあ、このままじやダメね」

「そうよ。こんな感じかしらね」

002

「ええつ、いきなりなんだよガハラさん」

「はあ、このままじやダメね」

「だから、何がだよ」

「阿良々木くんの全てを——脳みそから足の先まで私が管理してあげるつもりだつたのだけれど、正攻法で

はダメみたいね」

——監禁されたときのことを思い出して怖いんだ

戦場ヶ原はちやぶ台の正面から、ちやぶ台の横に移動した。少しだけ二人の距離が詰められる。そして自分のシャツをちらつとめくつてみせた。

「ちょ！ ガハラさん？」

その柔らかそうな、いや、実際に柔らかかったそこには、僕の苦手な物理の公式が書かれていた。正確には公式が書かれたテープがいくつも貼られていたのだけれど、それは、戦場ヶ原の綺麗な肌、余計なものはなにもない美しい部分にはあまりにも似合わない、ちょっと異様な光景だった。

「本物の耳なし芳一とはちょっと違うけれど、それは勘弁して頂戴。^{ちょうだい}さすがに肌に直接というのは汚れちゃうし、何よりも……書き辛かつたのよ」

「試したのか……」

「ええ、試したわ。その後、テープ用のテープではなくてセロハンテープでも試したのだけれどね。でも、やっぱり文房具は身体に使うものではないでしょ？ 私の玉のようなお肌が荒れちゃいそうで……」

そつか、それでテープ用のテープか——この女、頭がいいのか悪いのか……付き合っている僕にも、たまにわからなくなる。

ていうか、ガハラさん？ 身体に使うものじゃないというその文房具を、僕の身体に対しては色々と使つてくれたことは……もう、お忘れなのでしょうか——そんな僕の心の声を都合良く無視して、彼女は話を続ける。

「ふふ。よくあるシチュエーションじゃない？ 男の子は、こんな漫画好きでしよう？」

「いや好きだけど！ ていうか夢だけど！」

なんか変な漫画を読んだのか……^{ひなづく}謎読にも程がある！ なんだか偏りすぎじゃないか？

「前に読んだ漫画にこんな場面があつてね、阿良々木くんとやつてみたくなったというわけなのよ。ええと……タイトルは何だったかしら。『いけない！ ○○先生！』だったかしら？ それとも『○○○のプライベイトレッスン』だったかしら？」

なるほど。やつぱり。

まあ、わかる僕も僕だけれど……いや、男なら、みんなわかるよね？

……よし、それなら！

「じ、じやじやじやあ僕は、ガハラさんのお胸にある円錐の体積を知りたいです！ できれば手で測りたいです！」

「……阿良々木くん——頭大丈夫？」

「えつ？」

あ、あれ？ このシチュエーションはこんなノリで返すべきじゃないの？ あれ？ どこか間違った？

「馬鹿じやないの？」

馬鹿って言われた——

体中に耳なし芳一のごとく、テープを貼つてる女に馬鹿って言われた。

蔑^{さげす}むような、まるで虫でも見るような冷たい目と声

で、冷静に自分の彼氏を罵倒^{ばとう}する戦場ヶ原。ま、いつものことだから、いい加減慣れてきたつもりだけれど

——このシチュエーションで言われるのって、なんだか、すごくショックだ……

「ええと……」めん

謝ればいいのだろうか。そんな疑問を持つつつ、どう対応したら良いか悩みつつも、まずは謝つておいた。

「だつて、あなたの数学は得意でしよう？」

「……」

なるほど——ええと、まあそうだけど。もう意味がわからないけれど、ガハラさんなりのルールがあるんですね。

「じゃ、まずは物理のお勉強からね」

何事もなかつたように、話を続けだした。

うーん、僕の発言とガハラさんの行為、どっちが馬鹿なんだろう——

そんなことを考えながら、ガハラさんのプライベイトレッスンは始まった。

〇〇三

ちやぶ台の横から僕の隣へ、真横に移動してきた戦場ヶ原。

「まずは……私のかわいいおへそを隠してたる公式を覚えなさい。それから——私のことは、今からひたぎ先生と呼びなさいな」

ひたぎ先生は、僕の目を見つめながらそう言った。なんだか、すぐくクールな大人っぽい顔。本当に先生みたい。

おへそのちょっとと上までシャツはめくれていた。こ

の体勢だと、スカートの上からでも腰の悩ましいライ
ンがよくわかる。はあ、ガハラさんの腰はいいなあ
——このくびれがなんとも……

いやいや。今は物理の時間だ！

「ごつ、ごめん！　つい、緊張して、手が……

いい笑顔で僕の頭を撫でるガハラさん。なんだろ
う。ちょっと——いや、かなり嬉しいかも。

「じゃ、今覚えた公式を使ってこの問題を解いてござ
んなさい？」

もうなんだかノリノリなガハラさん。よし、今度は
うまく合わせないと——

「はい！　ひたぎ先生！」

「んふふ。いい子ね。正解よ」

いい笑顔で僕の頭を撫でるガハラさん。なんだろ
う。ガハラさん、嬉しいのかな？

「正解したら、もう剥がしちゃっていいわよ。んあっ
——こら。ちょっと。もつと優しく……丁寧に剥がし
なさい」

「次は——その上。おへそのちょっとと上ね」

「はい！ ひたぎ先生！」

少しづつ、勉強を進める僕達。

少しづつ、テープを剥がしていく。

少しづつ、シャツをめくつていく僕。

少しづつ、ひたぎ先生の綺麗な肌が露出してくる。

少しづつ、扇情的な姿になってくるひたぎ先生。

——もはや戦場ヶ原は扇情ヶ原（このフレーズは何回使われたのだろう？ どうとう言つちゃつた！）だ。それでも、物理の勉強がこんなに楽しいなんて思わなかつた！ ——厳密には物理の勉強じやないよう気もするけれど……

「すごいじゃない。阿良々木くん。あれだけ苦手だった物理がこんなにできているじやない？」

「ひたぎ先生のおかげです！」

実際、自分でも驚くくらい暗記できていた。あれだけ苦手だったのに……

「ちょっとだけ公式を覚えてしまえば簡単でしよう？」

あなたの得意な数学と重なるところも多いわけだし。それにしても——ふふ。羽川さんにはこのやり方はできないでしよう

ちよつと自慢気な、勝ち誇つたような表情のひたぎ先生。その可愛いのにクールな顔と、このシャツを胸の半分までめくつた姿の対比が、あまりにも恵ましい。「ひたぎ先生。でも、僕——」

僕は理性を保つため、必死に頭を使って公式を暗記していたのだけど、でも、それもそろそろ限界が——「もう少しだけ我慢なさい。今はお勉強の時間よ。さ、次はあなたの大好きなおっぱいよ」

そして、次々と問題を解いた僕は、とうとう先生のシャツをほとんどめくつてしまつた！ 戦場ヶ原のかつこいい——綺麗な胸は、かわいいブラに守られつつも、その姿を全てをあらわにしていた！

「ああっ、ひたぎ先生！ もうテープがありません！」

それにシャツも、これ以上めくれません！」

ちやつたのよ」

——用意周到なんだか、適當でいい加減なんだが……ひたぎ先生！ 僕は、もうわからないよ！

「じゃ、じゃあ、そんなわけで、このシャツは脱いじゃうわね」

なにがじゃあなたのか、何がそんなわけなのか——全くわからぬいけれど、するするとシャツを脱ぎ、ちょっとだけ乱れた髪を手でかきあげる彼女。

上半身はブラだけ。そして戦場ヶ原にしては、珍しい長くないスカートという姿。そして——何かを言いたげな目で僕を見つめる。

「戦場ヶ原っ」

その姿と表情に我慢できず、思わず抱き締めてしまう僕。ブラの上からだけど、やわらかい胸が僕の身体に密着する。

「ふふ。よくここまで我慢したわね。えらい阿良々木くんには『褒美をあげます』

頭を撫でながらキスをしてくる戦場ヶ原。

「ほ、僕……僕！」

「じゃあ、最後の問題。今度は物理じゃないわね。いえ、ある意味物理かも——このブラの外し方は覚えているかしら？」

「勿論だつ！ 戰場ヶ原っ」

「——でも、お願ひ。阿良々木くん。優しく、よ……優しくしなさい」

004

その後の話というか、今回のオチ。

「あの——ね。その……抱いて……つて言うのが、恥ずかしかったのよ。というか、ええと、あの……」

僕の横で、顔を真っ赤にして恥ずかしそうに言うガハラさん。

「初めてのときは、その……理由があつたでしょ？」

「そつか。そうだね——」

僕は彼女の長い綺麗な髪を撫でながら、頷く。
「でも、理由なんて、いらないんじやないかな」
ちよつと、キザな台詞。普段だつたら暴言が飛んで
くるような。

「——ふふ、それもそうよね」

柔らかな、恥ずかしそうな笑顔は、誰も知らない……
いや、僕だけしか知らない笑顔。

僕だけのものにしておきたいけれど、やっぱり普通
の女の子のように、自然に笑えるような日が来て欲し
い——

そんなことを思いながら、僕は……いや、僕達は、
幸せな時間を過ごしていた。